

話題の映画「シン・ゴジラ」は、10月9日の時点で興行収入77億円、動員531万人を記録している。上映以来マスメディアの多くが「シン・ゴジラ」を取り上げ、新聞やネット上では文芸評論家や政界や経済界、学者からの発言や論議が相次ぎ、今年の夏から秋は「シン・ゴジラ」が街を席卷している。

この作品は、5年前の3・11東日本大震災と福島原発事故を想起させる政府内部の危機管理体制を、細密で現実感をもって描かれている。1954年から始まったゴジラ映画シリーズの中にも時代を反映する社会性はあったが、所詮怪獣映画であった。しかし今回

「シン・ゴジラ」考

— 危機管理と意思決定

「現実と虚構」—

情報広報部長

山科 賢児

は見る側の鑑賞意識を高め、マニアックで多様な解釈が可能となっており、ゴジラ展や「シン・ゴジラ」を語り合う会が開かれるほど熱気に満ちている。

物語の流れはこれまで作られてきた怪獣映画と同様単純で、最後は巨大生物の脅威を阻む従来のストーリーである。放射性廃棄物に適応し深海で巨大化した「シン・ゴジラ」が東京周辺の街を破壊する危機に、最前線で立ち向かう政治家や官僚や科学者などのステレオタイプな人間模様を、贅肉をそぎ落とし早い展開で描いている。「現実と虚構」が交錯し、

危機管理対策のリアルさを示すと同時に、旧態依然の政府や官僚たちの危機対応力や意思決定力の稚拙さをパロディ化している。怪獣映画というよりむしろ政治家や官僚の現実と滑稽さを描いたポリティカル・ドラマである。映画では会議の場面とセリフがやたらに多く、おまけに会話が早くて聞き取りづらい。政治や官僚組織の仕組みを知らずに観ると政治家や官僚たちの役割や権限や力関係は難解であるが、政治の意思決定の仕組みや自衛隊の防衛力の実態などを知る上では新鮮なのかもしれない。

政治家や官僚機構や役所・企業などの組織は、危機管理や意思決定の責任の所在について本質的にルーズである。現在注目の東京都の豊洲市場移転前に明らかになった盛り土問題と水質汚染疑惑、それに東京オリンピックの予算がいつの間にか膨れ上がったという問題が顕著な例である。組織は責任を曖昧にする、前例を踏襲し冒険をしない、そして規制だけが多くなる社会を我々は目の前にしている。縦割りの組織にはコミュニケーションがなくなり、個人が組織の一員となった途端、保身に走り個人の顔が見えなくなる。既得権にしがみついている組織が肝心な時に機能するはずがない。そんな日本の現実にも辟易している。虚構という映画では組織のアウトサイダーが的確な意思決定を行い、問題を迅速に解決していく姿がテンポよく描かれている。そんな劇中のヒーローたちの活躍に観客は胸をスカッとさせ

るのだろう。

結末は「シン・ゴジラ」の脅威を政府・官僚組織の若きエリートたちの的確なアイデアと素早い行動力で封じ込め、「シン・ゴジラ」は東京の街に凝固し立ち尽すところで終わるが、東日本大震災や福島原発事故の現実ではそうはならなかった。虚構の「シン・ゴジラ」は倒せるが、現実はそのようなはずがないの観客は理解している。災害の記憶が我々の心の奥底に依然残っているからこそ、最後は人間の勝利で終わらなければならなかったのだろう。

人間が海底に投棄した放射性物質により進化したゴジラの襲来は、大袈裟に言えば人間社会や文明に対する自然からの警鐘であり、しつぱ返しである。それゆえ双方にとつてゴジラ存在は悲しく切ない。人間の力によるゴジラの制圧は、震災後日本人を襲った不安や喪失感から自信や誇りを取り戻すかもしれないが、所詮人間は自然の力に遠く及ばないはずである。ゴジラが東京の街を焼きつくし、洋々と深海に戻っていく。人間は茫然と立ちすくむ。だが誰ともなく新しい未来を向いて立ち上がる。そんな月並みなシナリオも良かったような気がする。あるいは人類の味方である濃厚なモスラが現れゴジラと死闘を演じるなどはどうだったろうか。

今年のもう一つのヒット作「君の名は」も東日本大震災を暗喩している。ヒロインが行う危機管理対応が功を奏して、彗星の衝突で破壊される村の住民は無事避難し生き延びる。過去と現在が行き来して解釈に戸惑う恋愛アニメ映画が「シン・ゴジラ」を上回る当たりを記録している。今の日本はやはりあのことを忘れてはいない。